

契沖と神道

高神信也

わが国古典研究史上古典の注釈と歴史的仮名遣いの研究において不朽の業績を残し今日においてもなお国学史その存在を高く評価されている真言僧契沖は、寛永一七年(一六四〇)尼崎に生まれ元禄一四年(一七〇一)隱棲先円珠庵において六二歳の生涯を閉じた。

かれの祖父元宜は肥後の加藤清正に仕えた戦国武将であったといわれ、門弟安藤為章の『行実』によると契沖七歳のとき大患に罹り医師に見離されたが密かに天満天神の号を書き毎日一百遍これを唱え三七日に至り天神が夢に現われ「吾は菅神、憐_レ汝至誠、除_レ病延_レ命、他日為_レ僧」といわれこれを父母に話し強く出家を請うたが仲々許されずやがて父母もその志厚きを知りこれを許し今里妙法寺丰定を師とし出家得度。年一三にして高野に上り約一〇年間東室院左学頭快賢につき事相教相の奥儀を極めたが師快賢は仏学のみならず倭学神道など広く諸学に通じた人であったという。下山後寛文二年(一六六二)二三歳にして曼陀羅院の住職となり二四歳にして

早くも阿闍梨の位に達した。しかしかれは寺の雑用に堪えかね寺を出その後室生をはじめ吉野葛城において厳しい修行を積み二七歳にして再び高野に上り円通寺快円を師とし菩薩戒を受けたが、山内の現状に絶望したかれは泉州久井に居を構え以後数年専ら漢籍仏典に親しみさらに三五歳泉州万町伏屋長左衛門宅に移り「日本紀以下国史旧紀専好_二倭歌_一博探_二歌書_一と本格的にわが国の歴史・文学を学んだといわれる。

さらに延宝五年(一六七七)には当時悉曇学の權威として知られた延命院覚彦(浄嚴)につき師の儀軌二百巻を書写しこれを奈良生駒山宝山寺に納めた。契沖四〇歳妙法寺を継ぎ母を引取ってその死に至るまで孝養を尽したという。元和三年(一六八三)にはかねて水戸光圀の依頼によって万葉集研究に従事していた下河辺長流の推薦により以後七年に亘りこの研究に打込みここに畢生の大作『万葉代匠記』を完成させた。

契沖の著述したものが甚だ多く『万葉代匠記』初稿本精撰本をはじめ『漫吟集』二〇巻『厚顔抄』三巻『古今余材抄』一

○卷『勢語臆断』四卷『百人一首改観抄』三卷『源注拾遺』八卷『和字正濫抄』五卷『勝地吐懷編』三卷『河社』二卷『類字名所外集』七卷『名所補翼抄』八卷その他『宗門疏鈔』若干巻といわれこれら数多くの著述はいづれも主著『万葉代匠記』の余材であった。いったい契沖の学問的背景としては真言学を中心とした仏教学、漢籍倭学に対する豊かな知識、快賢以来の神道への関心などが挙げられるが、元来宗祖弘法大師空海以来真言宗においては声字即実相の立場から言語を尊重し凡ての言語はそのまま宇宙の真理を表わし従ってあらゆる言語にはそれぞれ特殊な意味をもつものとして語学文学を尊重するが真言行者としての契沖もまた大師の思想に親しむ事によりおのづからかかる宗風を体得しかれをして古典研究へと向わしめたことであろう。

いうまでもなく近世国学とは、中世以来の伝統的歌学が儒仏の教えなど外来思想の影響を受け著るしく宗教的道德的傾向が濃厚であるのに対しあくまで人間自然の性情を尊重し人間本来の心情により和歌は作るべきものであるとする文学革新運動ともいべきものでこの運動を通し古代日本人の精神を探究し人間いかに生きべきかを窮極の目的とするもので、本居宣長は国学研究の先駆者としての契沖について「契沖はうし、歌書に限りてはあれど此道すじを開きそめたり。此の人をぞ此のまなびのはじめの祖ともいひつべし」（傍点筆者）

といっているが、その学統は契沖にはじまり荷田春満賀茂真淵本居宣長平田篤胤に至る流れで仏教嫌いである平田派においては契沖が僧侶なるが故にその存在を無視し春満真淵宣長篤胤らをして国学の四大人という。国学は宣長に至ってその研究は頂点に達したがその学問的純粹性もやがて著るしく宗教性を帯びここに復古神道の成立をみるが、いったい文献学者としての契沖は古道に対して如何に考えていたのであるうか。

もっともこれに関しての特定の著述はないが主著『万葉代匠記』をはじめ『厚顔抄』『勢語臆断』などを通してかれの古道観を窺い知ることが出来る。「本朝は神国なり。故に史籍も公事も神を先とし人を後にせずということなし」上古は神のみにて天下を治め給へり」といい上古は神の治め給う国であり人は神の下に従ったとしまた上古の神道は「淳朴なる上に文字なかりければ、唯口づかう伝へたるままにて」儒仏のごとくとくに纏った經典は存在せず旧事紀古事記日本紀などはいづれもただ神代に起ったことを記載したにすぎない。元来わが国の神道は自然の情を矯めずあくまで自然を尊重するものである。後世に至ってはじめて『神代紀』をもって神道の經典としたのである。儒仏の教えはいづれも西域や中国から伝えられたものではあるがしかし一旦わが国に伝わるや忽ちにして神道に同化しどちらが主か實かわからなくなる程同化したという。

ところでわが国は神明の皇統を伝える国であるという自覚は神代史以来存在したが弘法大師が神祇を厚く信仰されたことはすでに周知の事実であるが例えば大師の御撰述といわれる『胎藏梵字次第』『持宝金剛次第』『一八道念誦次第』などいづれもその表白神分の名目を挙げて修する密法をもって神祇に奉りその威光増進を期されているが、大師にとつて神明とはあくまで仏法を擁護する護法善神としての神であり弘仁七年（八一六）高野山を賜り諸堂建立に当り丹生高野両神を、また弘仁一四年（八二三）東寺を賜つた際稻荷神をそれぞれ鎮守として勧請し鎮護国家の精神による真言密教の興隆を志し真言密教の立場から神仏一体となつてはじめて鎮護国家が可能であるとされた。その著『声字実相義』のなかで「大日尊は梵には摩訶毘盧遮仏陀といふ。……もし応化仏あるひは大日尊と名づくといわば応化の光明普く法界を照す。故にこの名を得」と大日如来に毘盧遮那仏に天照大神を想定されたが、のち伊勢神道の影響を強く受け江戸初期以来広く大衆に読まれたといわれる『神皇正統記』において北畠親房は「此宗ヲ神通乗ト云。如来果門ノ法門ニシテ諸教ニコエタル極秘密トオモヘリ。就中我国ハ神代ヨリノ縁起、此宗ノ所説ニ符合セリ。コノユヘニヤ唐朝ニ流布セシハシバラクノコトニテ、則日本ニトドマリヌ。又相応ノ宗ナリト云モコトハリニヤ」と述べ真言密教と神道との關係を述べているが、大師の神國

思想を受け継ぐ契沖も「国を大日本と名つけ、神を天照大神といふも、をのつから大日遍照尊に冥合せり」といいさらに『元亨釈書』より引用して「天照大神、行基菩薩に託宣したまへる、神勅の詞おもひ合せうる。八幡大菩薩、弘法大師と密教を唱和して、鎮護したまへるなど内証はかりかたし」と大師と八幡神との深い關係を指摘し、また「神代紀云。伊奘諾尊則往至筑紫日向小戸橋之檉原、而祓除焉。然後洗左眼、因以生神、号日天照太神。後洗右眼、因以生神、号日月読尊。真言門の経軌の中に、両眼に應吒の二字を觀して、日月となす事とかれたれば、かれこれにつきて、瑜伽最上乘相応の地なれば、はか／＼しく知らぬ事なれと、梵文と和語と相かなふ所あるにつけて、思ひよれることを注し侍りぬ」といっている。いったい大師が真言密教興隆を根本精神として鎮護国家を志されたことは大師自身わが国は天照大神の治め給う国でありその子孫は代々天皇としてわが国を治め給うという堅い信念から天下太平・玉体安穩・五穀豊穰・万民豊樂を祈念されたもので、契沖もまた「本朝はもとより神國にて、人の世となりても天子は猶のこと神道にしたがひておこなはせたまひ、又御みづからも神道にましましけるゆへにやがて神と申奉れり」と天皇即神として天照大神以来の連綿とした皇統の存在を力説している。

かつて荷田春満が『創学校啓』において「古語通ぜずんば

則ち古義明らかならず、古義明らかならずんば古道明らかならず」という連続的論理は古語研究に端を発した国学は必然的に古道研究へと進み、「われももとより神の御典をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづかうごころを清くはなれて、古へのまことの意をたづねえずはあるべからず。然るにその古へのこころを得む事は、古言を得たるうへならではあたわらず。古言を得む事は万葉集をよく明らむるにこそあれ」とく真淵はから心を排斥する一方古道を知るにはまづ『万葉集』などの古典研究の必要性をといっているが、真淵を経て宣長に至ると研究そのものはまさに頂点に達するものの、その思想自体は著るしく宗教的色彩が濃厚となり「そもそも此道は、天照大御神の道にして、天皇の天下をしろしめす道、四海万国にゆきわたたりたる、まことの道なるが、ひとり皇国に伝はれるを、其の道はいかなる道ぞといふに、此道は、古事紀書紀の二典に記されたる、神代上代の、もろ／＼の事蹟のうへに備はりたり」とわが国は天照大神はじめ歴代の天皇が治め給う国として「まことの道」の普遍妥当性をときこの「道」は日本にのみ正しく伝わっているといひ、古事記日本書紀をして神典として崇敬し甚だイデオロギー化したのに対し、契沖は「本朝は神を本とす。然るに神代よりありける事なればみだりに議すべからず。後には嫌はしい事とはなれるをもてむかしを難すべからず。また昔をもて後の例とすべきにあら

契沖と神道(高神)

ず。たたありのままにてありなむ」人の世となりても国史に記す処、神異かそへかたし」と上古および国史に対する絶対的態度は、万葉集研究においても「此集ヲ見ハ、古ノ人ノ心ニ成テ、今ノ心ヲ忘テ見ルベシ」ととき、このようにかれの古典研究の基本的態度はあくまで古代を正しく認識する上には常に古代人になりきることの必要性をといっているが、宣長のごとく外来思想たる儒仏の教えを徹底的に排斥し天地創造はすべて「神の御所為」としこの「御所為」は「いとも奇靈く微妙なる物」であるとし神に関する一切の出来事はわれわれの知識以外であるとすると古典に対する異常なほどの絶対的信仰の態度に対し神儒仏に対する豊かな教養を基盤として古典研究に従事した契沖はいたすらに他を排することなく、上古をして淳朴な時代と想定し旧事記古事記日本書紀などに対し常に素直な心をもってこれを見詰め上古における神々の世界を現世に再現し日本は神国なり他国に例をみないすぐれた国であるとの認識に立ったことは大師以来の真言宗における神国思想を受け継ぐ一方、一真言僧として宗祖大師に対し「余苟学ニ大師_レ欲_レ無_ニ偏党_一」とする大師えの真摯な態度、絶対的帰依の心情がかれの神道思想の根底にあったのではなからうか。

参考文献 『契沖全集』(岩波版)。大山公淳『神仏交渉史』。高

神覚昇『密教概論』。同弘法大師の神祇観』。

(大正大学大学院修了)

二二九